No.10・11合併号

ニュースレター

2004年12月1日発行
関東学院大学 キリスト教と文化研究所
〒236-8501
神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号
TEL：045-786-7873（研究所直通）
発行者：森島牧人
（Director：Makito Morishima）

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

ご挨拶　所長　森島　牧人

2001年10月13日に発足しましたこの「キリスト教と文化研究所」も、早いもので三年目を迎えます。これまで当研究所に寄せられました多くの方々からのご支援ご協力に感謝いたします。さて今年度は、本研究所にとっては第二期の後半部分にあたります。各研究プロジェクトおよび作業委員会等のとりまとめをすると同時に、第三期に向かっての準備の時となります。それぞれが良い成果を得られるよう努力して参りたいと願っております。

当研究所では、既存の三つの研究プロジェクト（「いのちを考える」責任者：松田和憲教授、「奉仕教育における課題と実践」責任者：村上顕教授、「キリスト教と日本の精神風土」責任者：椙木紀男教授）に加え、今年度より一つの新しい研究プロジェクト（「バプテスト研究」責任者：村椿真理助教授）が立ち上がりました。当研究所の創設が、関東学院大学「日本プロテスタント史研究所」の改組転換であったことや、関東学院大学自体がバプテスト派の伝統に立っていることを考え合わせますと、とても意義深い楽しみなことであると思います。また資料委員会の中にも、昨年開催したシンポジウム「坂田祐と関東学院」を契機に坂田祐資料研究特別チーム（責任者：帆苅猛助教授）が新たに編成され活発に動き始めました。

またこれまでも研究所の図書資料の充実にむけ成果を上げている資料委員会につきましては、本年度購入予定の「路加伝福音書」をふくめて、日本におけるキリスト教関係の貴重図書90点を購入することが出来ました。次年度以降も引き続き図書資料の充実を図ってまいります。

当研究所ではこれからもこうした関東学院大学らしい研究テーマを探り出し、それぞれのテーマに相応しい体制を整え、研究活動・資料研究作業のさらなる充実を図っていくつもりです。最後になりましたが、皆様からの日頃のご理解を感謝すると共に、これからの研究所の活動すべてにこれまで同様変わらぬご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

目次

■ 所長挨拶 …… 1
■ 関東学院創立120周年記念「公開シンポジウム」 …… 2
松本　昌子／大島　良雄／高野　進／佐々木　晃
富岡　幸一郎
■ 研究ノート …… 7
藤原　久仁子
■ 資料紹介 …… 8
■ 研究プロジェクト …… 10
■ お知らせ …… 12

関東学院創立120周年記念

「公開シンポジウム」

校訓「人になれ　奉仕せよ」をいかに理解し、現実に活かしていくか

2004年10月6日は、関東学院創立120周年を記念する日である。本年は、その日に、大学行事として公開シンポジウムが大学宗教委員会並びにキリスト教と文化研究所主催して開催した。

シンポジウムは、松本昌子学院長の挨拶のあと、講師4氏による発題を中心に来聴者との間で意見の交換があった。

当日の模様を紹介して、校訓「人になれ　奉仕せよ」の精神が、学院に関係する人々の理解に供することにしたい。

挨　拶　学院長　松本　昌子
発題1．大島　良雄（客員研究員／元文学部教授）
発題2．高野　進（研究員／経済学部教授）
発題3．佐々木　晃（客員研究員／元高等学校教諭）
発題4．富岡　幸一郎（所員／文学部教授）

挨拶

学校法人関東学院 学院長　松本　昌子

関東学院は1884年10月6日に横浜山手に生徒数5人とも6人とも言われている横浜バプテスト神学校ができまして、それを源流として、120年を歩んでまいりました。一口に120年といいましても明治、大正、昭和、平成に渡る、19世紀から21世紀の3世紀に渡る120年であります。1984年に100周年を迎えました。丁度その折に、釜利谷校地が開設されてそこで100周年が祝われましたけれども、創立から100年と120年とを比べてみましても、この20年の間の変化、特に大学におこった変化は本当に目を見張るばかりであります。目まぐるしいというような変化で実に規模は大きな総合学園になりました。大きくなってくるとよく起こることは、あの白骨温泉と同じことであることは否めないことであります。かといってあの120年前の元の姿に戻ったらいいのかというのでは絶対にありません。急激に変化するこの世界の状況の中で、一貫して変えてはならないものとして守ってきたものは建学の精神、それは何かということは常に現代史の問題として問い続けなければならないと思います。ですから、「人になれ　奉仕せよ」をいかに理解し現実にということは、学校ですから教育カリキュラムの中に、あるいは学生の奉仕活動の中に、その他学校行事総ての中に生かしていくかということであろうと思います。これは本当に今は、関東学院が関東学院らしく在りながら　尚、生き残るための死活問題であろうと思います。ここに居られる4人の講師の先生方から発題が頂けることを有難いと思っております。最後まで御静聴くださいますようにお願いいたします。

客員研究員　大島　良雄

「人になれ」「奉仕せよ」は、坂田先生が建学の精神を具体的に表現するものを求め、祈りのうちに上から啓示されたものです。質実、剛健、勤勉などと言う徳目を揚げ其の実践を奨励するものではなく、「人とは何か、人は如何に生きるべきか」と言う人間にとって根源的な問題を問いかける極めてユニークな校訓であります。

「人になれ」において求められている人間像について、先生は教師としての自分を省み、「不完全な人間は自分以上、自然以上の力に信頼する以外にはない。ここにおいて宗教的希望となるのである。」と、述べ、先生の人間理解がキリストの贖罪愛を信じる純粋な福音信仰に基づくものである事を明らかにしておられます。

創造主なる神の前に立ち、父なる神の子として応答する人間は、同時に隣人に対して同胞として応えあう存在であります。それ故、キリストによって新しくされた人間はお互いに仕えあう存在であり、人になる事は、即ち人に奉仕する人間になることであります。

南原繁が先生を追悼した際に「新瀬戸稲造からカーライルの講義を受け、『諸君は何かをしようとする前に、何かにならねばならぬかを考えよ。To doの前にto beを考えよ』と教えられた。」と話されたのを引いて、それが『人になれ』『奉仕せよ』と言う校訓の作成に影響を与えたのではないかと考える人もいます。或いは札幌農学校の教頭クラークが校則の代わりに与えたBe a Gentlemanの影響があったかもしれないと言う人もいます。しかし、坂田先生自身は「当時は『作人』と言う言葉があり、『作人館』と言う学校もあったが、私が祈って示されたことは『人になれ』であった」と、述べておられます。

「人間になれということと奉仕せよと言うことは離すべからざる事で、吾人の徳は奉仕する事によって磨かれる。即ち、立派な人間になって人のため、社会のために尽くすことがわが学院の標榜するところである。」と言う先生の言葉を引いて、「人に奉仕することによって魂と魂の触れ合いを体験する事ができるのでありまして、奉仕することの出来る人間こそ真の人間である。」と、校訓に理解する人もいます。しかし、私は「どの様な人間になるか」即ち、to beがto doに先行する、キリストの贖罪を信じて新しく生まれかわることによって、真に隣人に奉仕する事が出来るようになると受け止めています。

（元文学部教授）

研究員　高野　進

次の３点に絞って、お話します。（１）新たにできました１号館のファサードは、Ｃ.Ｂ.テンネー博士の言葉がデザイン化されております。博士はアメリカのコーネル大学正門にあるような文を掲げたかったと述べています。「汝は日々ますます学識と思慮を身につけるために、ここより入れ。汝は日々祖国と人類のためにますます有益とならんために、ここより出でよ」。さらにこう記しています。「自分のことだけにとどまる教育は、劣悪な種類

である。真の教育は、無視の目的がある。そのような教育は自分を越えて、他の人々を祝福するに至る。わたしたちは自分たちのために何かを得ようと大学に入るのではなく、世界において、より大きな奉仕をする準備のために、入るのである。大学の門を出ることは、入学と同時に重要である。ここでどんな優秀な学生を育てたとしても、彼らがその賜物を自分のために用いるかぎり、彼らを大いに誇ることはできない。他者への奉仕を忘れてはいけない。」そしてイエス・キリストの生き方（マルコ 10:45）がお手本であると指摘しております。

（２）白山源三郎先生は経済学者として社会学的視点から解釈されます。「奉仕することは、自分をむなしいうして、全体のため、社会のため、または他人のために尽くすということで、人間として好ましい実践行動であり、共同社会で、すべての人間が幸福に暮らしていくためには、誰でも心がけねばならぬ、実践行動である。」さらに戦中の強制された奉仕を批判して、内側からあふれる真の奉仕はキリスト教信仰に根ざすとも述べておられます。「『奉仕』は強いられてこれをしたり、受動的にこれをするものではない。そのような奉仕はそれはもはや正しい『奉仕』ではない。自らの心からこれをせねばならない。真の奉仕をなし得るような心の状態を備え得たことだけで、誠に喜ばしいと言わねばならない。その底意から出た奉仕を実行せねばならない。これが真の奉仕である。」

先生は奉仕ができるようになるためには、それなりの資格、余裕をもつように努力せよと教えておられます。「真に奉仕せんとすれば、まず自己を充実せねばならないわけである、逆に言うならば、自己が未完成，不十分なものに奉仕はあり得ない。・・・こう言うと、奉仕のできる人は何ものか奉仕することのできる資格を持つ人である。すなわち奉仕をなし得る人は幸福であると言える。われわれは奉仕をなしうるがごとき人間に先ずなりたいものである。聖書に『あたうるは受けるより幸いなり』とある。」これは経済的には豊かになったが、他者への思いやりを失った日本人の人々、それを再生産している教育の現場に、猛省を求めます。

（３）坂田祐先生は師と仰ぐ内村鑑三先生の『後世への最大遺産』からも示唆を受けていると推測されます。宗教改革の精神を徹底したピューマニズム、バプチストの思想に校訓の背景、解釈と実践のための手がかり、を見ることができます。ルターの『キリスト者の自由』は「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって。何人にも従属しない。」「キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する。」とします。そして聖句を引用しています。「私はすべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷となった。」Ｉコリント９：１９「互いに愛し合うことのほかは、何人にも借があってはならない・」ローマ１３：８

自分自身のことばかりではなく、どの人間をも重んじる教育を推進しなければなりません。その中には、いと小さき存在を人間として大切にする教育を実践しなければなりません・「奉仕せよ」には、まず真の神への奉仕（礼拝）があります。またこれは真理への奉仕でもあります。学問、科学、技術も、何のため追求されるのかを、吟味する知恵をここから得なければなりません。他者への奉仕も含まれます。この他者には世界を視野に入れるだけでなく、自然環境、他のあらゆる生けるものすべてまで含まれるのであります。

（経済学部教授）

客員研究員　佐々木　晃

内村艦三門下に新たに入門を許された者の群れの一つ白雨会は、坂田祐の発言で誕生した。当初12名の会員の中に高谷道男がいた。高谷は1995年、102歳で永眠したが、『外人墓地に眠る人々』（太田愛人著1981年）の序文の中で、「坂田祐の精神である『人になれ、奉仕せよ』は残った。然し坂田祐は忘れ去らている。せめて『坂田記念館』でもと思う卒業生はいないのだろう。」と慷慨した。これを読んだ町田四郎は「決して忘れているのではない」と反論した上で、「高谷先生の言葉はわれわれ卒業生を励ましている言葉」と付け加えている。坂田祐逝って35年、白雨会最後の会員となった高谷道男も、中学部第1回卒業生町田四郎も既にこの世を去った。「忘れている」「忘れていない」という相対する論評もいわば関東学院を思う気持ちでの上で相通じている。

1919年4月9日、第1回入学式に坂田祐は147名の中学生を前に、祈って神から示された言葉として『人になれ』『奉仕せよ』を校訓として与え、機会ある毎にこれを協調して今日に到っている。神を畏れる人になり、キリストの新しい戒め『人がその友のために自分の命をすてること、これより大きな愛はない』を守って奉仕する人間を世に送りだすことが創立者の教育理念であった。

1965年3月大学卒業式で学院長坂田祐最後の告辞は、「最も大切なる、キリスト教の精神に基づく、学院建学の精神の具体的表現である校訓をも一度繰り返してお別れの辞と致します。『人になれ、奉仕せよ』」で終わっている。

本年（2004）9月29日、中学部22-4回卒業生（1945）30名が三春台のテンネー礼拝堂（旧小講堂）に集って礼拝した。コリント前書3章10～17を文語訳聖書で読み、坂田院長愛唱讃美歌「せいなる、せいなる、せいなるかな」を歌った。開会の祈り、主の祈り、祝祷の終わりに唱える「アーメン」の声が昔のたたずまいがそのまま残っている「礼拝堂」に響いた。先輩の牧師による説教『この基はイエス・キリストなり』を聴き、在学中折に触れて聞かされた校訓「人になれ、奉仕せよ」の心を深く吟味する機会を与えられた。半世紀前、少年の心に蒔かれた種は風化することなく今なお、生き継がれている。語りつづけよう「人になれ、奉仕せよ」。

客員研究員　富岡　幸一郎

学院の創立記念日にあたり、校訓である「人になれ、奉仕せよ」という言葉を、あらためて想起し、その意味するものに思い及ぶ事は大切であろう。とりわけ、少子化といわれる状況で受験生は激減し、私立大学の教育のあり方が、根本的に問い直されているとき、キリスト教主義の学校としての、その原点に立ち返る必要がある。

「人になれ」とは、人間と社会の水平的な関係、いいかえればこの世の相対主義のなか

にとどまるばかりではなく、人間をこえた超越的な、神的なるものを感受することによって、はじめて実現しうるものではないか。新渡戸稲造は、人生は「社会のホリゾンタル（水平線）的関係のみにて活（いき）るものではなく」、「一歩を進めて人は人間と人間とのみならず、人間以上のものとの関係がある。ヴァーチカル―垂直線的に関係のあることを自負したい。我々はただに横の空気を呼吸するのみで、活るものではなく、縦の空気をも吸ふものであることを知って貰ひたいのである」（『修養』）と、青年たちに向かって語った。今日、求められているのは、この「縦の空気」を吸うということだろう。それは決して人間や社会の上下関係に従うということではなく、むしろ、そうしたものが相対的、水平的な関係であり、それを乗りこえる価値を発見するということであると思う。したがって、「奉仕せよ」とは、人に命令されるのではなく、社会の上下関係とは別の、「垂直線的に関係」の自覚に基づく実践力に他ならない。

私は、関東学院女子短期大学に八年程勤めたが、短大では二年生の秋に、リトリートという行事をやっていた。二泊三日、伊豆の天城山荘で教員と学生が共に聖書に学び、いろいろな事を語り合うという有意義なものであった。短大の消滅とともに、こういう学校行事がなくなってしまったのは、残念という他はない。短大の改組のときに、「キリスト教では売りにならない」との声があり私は呆然とした記憶がある。「売り」も必要だ。しかし、“建学の精神”なくして、何の私立大学教育であろうかと思う。今回のシンポジウムに参加できたことは、本学の教員として大変よかった。残念なのは、折角のこういう集いに、大学学長や理事長の姿が見えなかったことである。

シンポジウムに続く質疑応答の時間では、以下のような意見が出され活発な討議がおこなわれました。

■実社会に出て、いろいろのことを体験し、苦しみ失敗した時に、校訓を思い出します。いま在学している学生・生徒一人一人に、校訓を、また関東学院の校訓がキリストを土台にしていることを是非伝えていただきたい。

■校訓「人になれ　奉仕せよ」と、教育勅語の内容とがどう関わっていたのかというあたりについてお聞かせいただきたい。

■「人になれ　奉仕せよ」という校訓を、どの様に現場で教え、実践してきたかと言うあたりをお聞かせいただきたい。

■講演を伺い「人になれ　奉仕せよ」について、現場の人間として如何に理解し実践するのか、大きな課題だなと思いました。次回はぜひ、今日のようなシンポジウムを、実際の現場に立っている学院各校の先生方が、夫々の立場でどのように実践しているかをテーマに、開催していただきたい。様々な具体的課題が出てくるのではないかと思います。

最後に森島所長により、「今回のシンポジウムのテーマはとても大きなテーマであり、また関東学院教育の根幹に関わるものであります。今日のシンポジウムだけで言い尽くせるものではないと思います。今後ともぜひ学院のなかにあって、「大学宗教教育センター」あるいは「キリスト教と文化研究所」等の場で、今日語られました一つ一つの重要なテーマを、さらに深めあってまいりたい…」と締めくくられ、盛会のうちに、一同満たされた思いの中、引き続きもたれました懇親会の会場へと向かいました。

研究ノート

客員研究員 藤原 久仁子

2004年10月2日、『キリスト教と日本の精神風土』研究プロジェクトの研究会において、神津島における民俗慣行の変容に関する研究発表をさせていただいた。以下は、「巡礼地化する島：観光事業と信仰/実践の経済学」とのタイトルで行った発表の要約である。

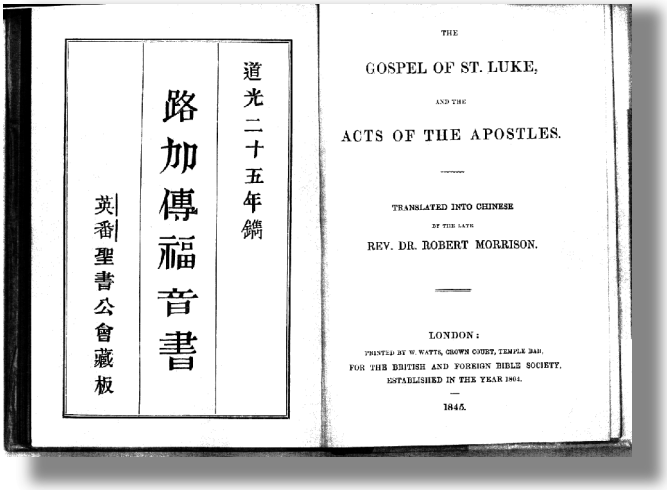
神津島には、日韓のキリスト教徒が巡礼に訪れる「殉教者おたあ・ジュリア」の「聖墓」がある。「おたあ・ジュリア」は豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に連れて来られた朝鮮貴族の娘とされる。キリシタン大名小西行長のもとで育てられ、信仰の日々を送っていたが、1612年、徳川家康のキリスト教禁教令によって大島、新島の順に流され、最後は神津島で殉死した人物と伝えられている。1960年代にジュリアに関する資料が見つかり、神津島の流人墓地内にジュリアの墓が「発見」された結果、ジュリアの死を悼む巡礼者が日本と韓国から訪れるようになった。1970年より毎年5月にジュリア祭が開催されるようになり、聖体を拝領することなく亡くなったジュリアのためにミサが挙げられている。本発表では、ジュリア祭の開催とそれに伴う人々の流動が、神津島に住む人々に与えた影響について検討し、報告を行なった。

ジュリア祭は、ミサのほか、「聖地巡礼」（ジュリアの墓への訪問）や十字架像の前での賛美歌の斉唱等、宗教色の強い行事と、日韓の小中学生が歌や踊りを披露する「日韓親善芸能大会」から構成される。神津島に住む人々の中にキリスト教徒は一人もおらず、彼らは通常後者の行事のみに参加する。つまり、外部から島を訪れる巡礼者たちにとって、ジュリア祭はキリスト教の祭儀としての側面を持つ一方で、神津島の人々にとっては日韓の文化交流の場としての側面を有している。神津島の人々は、村が主催する新たなイベントとしてジュリア祭を受け入れているのであり、それは島の観光資源の一つ、文化交流の場として位置づけられる。今のところ、民俗的信仰とキリスト教という異質な二つの宗教的要素の同化・融合による新たな信仰体系の成立と呼び得るような構造的変化、すなわち「シンクレティズム現象」は見出されない。しかし、島の民俗慣行及び「語り」のレベルにおいては、巡礼者たちのジュリア信心の影響を受けた様々な変化が起きていることが、筆者のフィールドワークより明らかとなっている。

本報告では、現地で得た資料及び調査データを手がかりに、神津島において現在進行中の諸変化について人類学的視点から検討を行い、巡礼地化のプロセスが既存の信仰や実践に与える影響の一端について明らかにすることを試みた。

資料委員会　最新収集資料紹介

ロバート・モリソン訳『路加伝福音書、使徒行伝』


道光二十五年鐫

路加傳福音書

英國聖書公會藏板

THE

GOSPEL OF ST. LUKE,

AND THE

ACTS OF THE APOSTLES.

TRANSLATED INTO CHINESE

BY THE LATE

REV. DR. ROBERT MORRISON.

LONDON:

PRINTED BY W. WATTS, CROWN COURT, TEMPLE BAR,

FOR THE BRITISH AND FOREIGN BIBLE SOCIETY,

ESTABLISHED IN THE YEAR 1804.

1845.

この聖書を翻訳したR・モリソン（Robert Morrison　1782～1834 ）は、1782年1月5日、英国ノーサムバーランドのモルフェスに生まれた。ホックストン・アカデミーで学び、ゴスポートのミッショナリー・アカデミーで学んだが、中国伝道を志し、当時鎖国下にあった清国宣教のため、聖書漢訳事業を英国聖書協会から委託されたプロテスタント最初の中国宣教師であった。

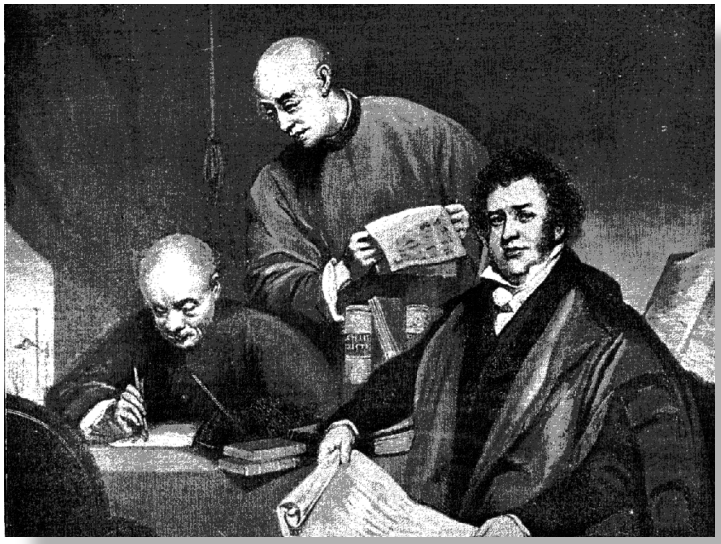
1807年彼は夢を果たしてマカオに渡航したが、精力的に中国語を学び、1809年には東インド会社の通訳官を務めつつ、広東で聖書翻訳事業に着手した。彼は英華字典の編纂を進めるかたわら、中国人の協力を得て、先ず新約聖書の『使徒行伝』から翻訳に着手し、1810年先ずそれを一千部刊行した。その後『ルカによる福音書』をてがけ、次々と新約各書を翻訳出版し、1813年（嘉慶18）9月30日、新約聖書をすべて訳了すると、翌1814年『耶穌基利士督我主救者新遺詔書』と題して、広東にて木版印刷二千部を刊行したのであった。1813年、W・ミルンがモリソンと合流し、ミルンの協力も得ての刊行であったが、新約全書（新遺詔）の漢訳刊行はこのR・モリソンが初めてという、まさに夢の偉業達成であった（旧遺詔は1823年刊行）。

さて、本書であるが、これは刊行が道光25年と記されており、1845年、ロンドンでW・ワットにより刊行された合本聖書であった。刊行は、THE BRITISH AND FOREIGAN BIBLE SOCIETY である。モリソンがはじめに『使徒行伝』を出版してから35年後のものであるが、『路加伝福音書』と『使徒行伝』だけが特別に合本されている聖書として、希

少性の高いものである。この聖書の存在はこれまであまり知られていなかったが、おそらくモリソン聖書「神天聖書」の復刻版として刊行されたものと推測される。しかしこれがそうした単なるメモリアルなのか或いはその後の改訂版であるのか、最終判断には厳密な比較対照確認が必要である。モリソンの聖書の改訂はミルンが後を引き継いだが、マカオ生まれのモリソンの第２子、ジョン・ロバート・モリソンも父の遺志を引き継ぎ、Ｗ・Ｈ ・メドハースト、Ｋ・Ｆ・Ａ・ギッツラフ、Ｅ・Ｃ・ブリッジマンらと聖書改訂に従事した。

いずれにせよ、この時代の漢訳聖書の歴史をたどる上で、ひとつの重要な資料であることに間違いない。ロンドンで 1845 年に出版されたと書いたが、当然ここで使用された活字や印刷にもこの書の重要な特色が見てとられる。またまだ調べがついていないが、この二書だけが美しい製本で出版されているところにも特別な意味があったことが推測される。「英番聖書公会蔵版」と記され、17 × 11.5 センチ、124 頁、洋装、三方に金縁が施された美しい製本である。159 年前に出版された書でありながら痛みがほとんど見られず、未使用の完全な形で残されている。プロテスタント和訳聖書の研究に関連して、今後の詳細調査が待たれる注目すべき一冊である。

（文責・村椿真理）



研究プロジェクト報告

「いのち」

「いのちを考える」研究プロジェクトチームは、プロジェクトを開始して３年目に入り、４月28日に第１回研究会を開き、過去２年間の研究活動を踏まえて、今年度のメイン・テーマを「生の肯定と死の受容」と定め、随時、所員が研究発表を行い、それを年度末にまとめて所報に掲載することとした。第２回研究会（６月23日）では、「いのちに子供がどのように出会っているのかー子供と授業ー」と題して、客員研究員・安達昇氏が、最近頻発する子どもにまつわる諸事件、例えば佐世保事件などの事例を取り上げた上で、小学校の現場における「総合学習」においていかに子供たちと関わっていくか、提言を含む研究発表のあと、質疑の時間を持った。第３回研究会(9月29日)では、「『いのち』の選択ー自己決定権の範疇とそのあり方」とのタイトルのもと、客員研究員・三浦一郎氏が、法的カテゴリーの問題として、いのちの選択にかかわる問題、いのちに関する自己決定権、いのちについて考える生の価値と死の受容などについて発表を行い、その後、討議の時をもった。なお第４回研究会は、11月24日に開催予定で、客員研究員・吹抜悠子氏が、いのちを慈しむ「全人的ケアー」と題して発表することとなっている。

（文責：松田　和憲）

「奉仕教育における課題と実践」

2004度第１回研究会を５月20日に開催し、本年度の研究テーマを「中学校の英語教科書と小学校の国語教科書中の奉仕とボランティアについての記述について調査分析」とし、調査のためのキーワードを設定し、それを中心に調査することとした。

第２回研究会（６月24日）では、「英語教科書分析の報告(その１)」(影山所員)、また第３回研究会（10月28日）では、「奉仕教育に関する中学英語教科書の分析」(所澤所員)に関する報告を中心に、意見交換と分析を行った。第４回研究会は12月９日に「国語教科書における奉仕教育」に関する報告を中心に開催する予定でいる。

（文責：村上　顕）

「キリスト教と日本の精神風土」

10月２日に(土)に2004年度第三回研究会次のようなテーマで開きました．参加者９名でした。発表者藤原久仁子客員研究員，テーマ「巡礼地化する島：観光事業と信仰/実践の経済学」でした。次回は、すでに各方面に案内いたしておりますように、公開研究会として開きます。また，１月の研究会も公開を予定しております。多くの方の参加を期待しております。

■第四回研究会

2004年11月20日（土）／午後１時～３時／講師：西川重則氏（靖国神社国営化反対福音主義者の集い・代表）／テーマ：主に在って、歴史に学び、今を生きるーあらためて靖国神社問題を考えるー

■第五回研究会

2005年１月26日（水）午後３時～５時／講師：森一弘氏（カトリック教会・司教）／テーマ：現代世界におけるキリスト理解

「バプテスト研究プロジェクト」

本研究会は去る10月2日、最初の研究発表会を9名の参加を得て行なった。今回の発表は将来のプロジェクト研究活動の方向性を定めていく上でも重要なテーマが掲げられ、高野　進研究員から「バプテストの歴史と思想研究―現代的意味」と題して発表がなされた他、佐々木敏郎客員研究員より「最近の国際バプテスト研究の動向」と題して発表がなされ、これまでのバプテスト研究の概観、最近の状況、今後の研究課題などが、それぞれ発表者により提示され、参加者相互に質疑を交わす充実した学びの時となった。次回は12月4日(土)1時から本研究所にて第3回研究会が予定されている。発表者、発表題目は以下の通り。①川島第二郎客員研究員による「初期日本バプテストのミッション本拠地、横浜山手67番及75番Bにおけるミッション・プレスとミス・サンズの聖教学校の活動の詳細について」、及び②松岡正樹客員研究員による「英国バプテストの日本伝道について」である。それぞれ現在執筆中の論文からその概要を発表される。現在本プロジェクトのメンバーは以下の通り。研究所員：影山礼子（法学部）、村椿真理（法学部）、森島牧人（文学部）、安田八十五（経済学部）、研究員：高野　進（経済学部、学院宗教主任）、客員研究員：大島良雄（元文学部）、川島第二郎、佐々木敏郎（元法学部）、松岡正樹。

（文責：村椿真理）

「坂田祐資料研究特別チーム」報告

現在、日記の解読を中心に研究活動を進めている。日本文の日記は坂田創氏、英文の日記は佐々木晃氏に解読・解説をしていただいている。坂田祐の日記は日本文にせよ、英文にせよ、独特な小さい崩し字で書き連ねてあるので初見のものにとっては読み取るのが非常に困難である。さいわい、坂田創氏も佐々木晃氏も長年坂田祐と身近に接して来られたのでその字の癖もご存知で、ご苦労をしながらもどんどんと読みすすめてくださっている。

このほか、坂田祐関係の資料の調査も行っている。今夏には、坂田記念館で資料を調べさせていただいた。その際、坂田祐の日記と思われるものも多数見つかった。今後、坂田祐関係の資料、とくに、日記を初めとする手書きの資料の確認調査も行いたいと思っている。

（文責：帆苅　猛）

資料委員会

資料委員会はこれまで、5月20日、7月15日、8月31日と定例委員会を開催し、資料収集の情報交換、購入希望古書の提示検討を重ね、既に稀少価値の高い古書文献6冊他を入手した。また十数冊に亘る購入希望資料リストを作成し、研究所運営委員会にも報告してきた。購入資料の中にはその希少価値の故に高価なものもあり、委員会はなお資金を必要としている現状にある。そうした古資料文献は、年度末にかけて可能な限り更に入手したいと願っている。

なお本年も8月夏期休業中に4回、旧研究所の残存図書整理作業を行い、図書資料（和書）の約半分をようやく分類整理することができた。またマイクロフィルム資料の一部確認作業も同時に行った。これらの作業は今年度冬期休業中にもデータ化作業を継続して行う予定であり、徐々にではあるが作業完了に向かって進んでいる。

（文責：村椿真理）

お知らせ

公開研究会のご案内

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの定例研究会を公開で行います。多くの方々が参加されますようご案内いたします.

■研究会日時：2005年1月26日（水）　午後3時～5時
■研究会場：関東学院大学2号館2階　第4会議室（金沢八景校舎正門右）
■講演テーマ：平和へのメッセージとしてのキリストの山上の説教
■講師：森一弘氏…1938年生まれ、ローマカトリック教会司教、
財団法人真生会館理事長、カトリック神学院講師。

講師からの呼びかけ

キリストの最初の説教を、人類に向けたキリストの所信演説という視点から、ご一緒に読み、そこから混乱する現代世界を照らす根本的な光を汲み取って見たいと思います。

2004年大学クリスマス行事

■クリスマスキャロル
日時：12月9日（木）18：30～
場所：京急追浜駅前
出演：聖歌隊

■クリスマス礼拝
金沢八景キャンパス（六浦校地）…12月13日（月）16:10～17:40
金沢文庫キャンパス……12月13日（月）12:00～13:00
小田原キャンパス……12月14日（火）12:20～13:10
金沢八景キャンパス（室の木校地）…12月17日（金）12:10～13:10
＊全キャンパス　演奏者：歌手　沢 知恵（さわ ともえ）

2004年度大学クリスマス行事の問い合わせ先は、
関東学院大学宗教教育センター（045-786-7218）まで。

2005年3月発行予定

関東学院大学キリスト教と文化研究所所報『キリスト教と文化』第3号